

佳作  
(一般の部)

「娘が味わったパン」

吉本  
綾

こんにちは。初めてお手紙を書きます。柳田先生に大好きな絵本のこと伝えられるなんて、とてもうれしいです。

私には娘が二人います。まだ言葉も話せない頃から、本に親しんできました。特に保育園の先生には、朝に晩にと読みかかせをもらい、様々な世界に旅していたようです。園の帰り道、桃太郎になっていたり、子やぎになっていたり、なりきっているもので、その日に読んでもらった本を想像するのが私の日課でした。

まだ下の娘が二歳のころ、「あむ、あむ、おいしいね」。と、本の絵を小さい指でつまみ、食べる仕草をするのが大好きでした。ある日、

「おたあたん、はい、あむあむおいしいね」。

と何かを私にくれました。それは「カラスのぱんやさん」に出てくるかめパンでした。そうとうお気に入りだったようで、何度も私にもくれて、自分でもあむあむおいしいねを繰り返していました。私は、パンを食べては、おいしいねと笑顔を見せる娘の姿に、涙があふれて止まりませんでした。

娘は当時、重度の食物アレルギーがあり、卵や小麦、牛乳、パンの材料になるものは全て口にすることはできませんでした。この子は、どんな気もちで、おいしいねと言っているのだろうか。いつまで食

べられないのだろうか。おいしいって言うてはい  
るけど、味わうことなんかできないのに。いろいろ  
な気もちが心の中でぐちゃぐちゃしていました。

すると娘は、心配そうに私を見て、

「こっち、あまいよ」。

「あむあむおいしいね」。

と違うパンを食べさせてくれたのです。私は、はっ  
としました。娘は、確かにパンを味わっていたので  
す。私が考えている以上の想像力を全力で使い、お  
いしいパンを味わっているのだと思いました。た  
くさんの本に触れていた娘は、想像の翼を手に入  
れて、行きたい所に行き、やりたい事を自由にやり、  
家に帰ってきていたのでしょう。

柳田先生。娘のあむあむ、おいしいね。は、それ  
からしばらく続きました。それが懐かしい思い出

になった今、二人の娘たちは、どこを旅しているの  
か、聞いてみたいと思います。そして、私も二人に  
話して聞かせようと、今日もまた読んでいます。柳  
田先生。いつか、楽しく本のお話ができる日を楽し  
みにしています。お元気で。

### 柳田邦男先生からのメッセージ

二歳の娘さんが絵本の『カラスのパンやさん』の  
“かめパン”を、お母さんに「あむあむおいしいね」  
と言って食べさせてくれる情景は目に浮かぶよう  
です。重度の食物アレルギーで本物のパンは食べ  
られないのに、心配するお母さんの気持ちを察し  
て、お母さんの顔を見て、「こっち、あまいよ」と  
すすめてくれる。何とやさしい心を持っているこ  
とかと、涙がこぼれそうになりました。

幼い子の心のなかでは、現実世界とファンタジーの世界に境界がないのですね。ですから、絵本や童話で語られている話に入りこむと、それは現実体験と同じように受け止めるのです。しかも、ファンタジーのほうがドラマチックなので、現実体験より強く心に入りこみ、深く刻まれることが多いとさえ言えます。

絵本の読み聞かせが重要なのは、そういうファンタジー体験が、きめ細かなやさしい感性や思いやりや考える力の発達にプラスのはたらきをするという点です。すばらしいエピソードを報告してください、ありがとうございます。